

平成25年度学内版 GP 成果報告書

取組名称	海外牧場実習プログラム～学生の内向き志向の打開を目指して～
実施組織 (または対象のカリキュラム)	農学部・食料生産科学科
※連携する他学部・機関がある場合は記入	
実施責任者(所属)	神 勝紀 (農学部・食料生産科学科)
取組の目標	<p>学部生に海外での牧場実習を体験させることにより、以下のことを促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外に目を向ける自発的な取組みを意識させる ・海外の農業事情を理解させる ・人的交流の活性化を図る
<p>1. 目標達成のために行った活動と成果 (箇条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする)</p>	<p>1. 以下の概要にて国際実習を実施した:</p> <p>[期間] 2014年2月19日～3月1日(11日間)</p> <p>[受入先] タイ・カセサート大学農学部</p> <p>[参加者] 学部生5名、引率教員1名</p> <p>[内容] 学部の概要説明、飼料工場・牧場・屠畜場/食肉工場見学 学内農場見学、現地学生とのディスカッション 等</p> <p>受入先の全面的な協力のもとで、大学周辺に点在する様々な動物生産関連施設について案内を受けた。また、ほぼすべての行程で同大学学生(学部生、大学院生)が同行した。実習開始当初は英語によるコミュニケーションに躊躇気味であったが、実習が進むにつれ訪問先での英語による説明を自ら理解し、積極的な質疑を行うようになった。また、参加学生は終始、礼儀正しくまた活発に振舞い、先方に対し非常に良い印象を与えることができた。</p>
<p>2. 目標達成度に関わる所見と今後の展望</p>	<p>【海外に目を向ける自発的な取組みを意識させる】・・・上記のように、学生は実習が進むにつれて、本プログラムに主体的に取り組むようになり、積極性の増加は顕著であった。さらに帰国後において、修士課程に進学予定の学生から、国際共同研究への参加希望が出された。これらの事実から、本実習への参加が海外で臆せず行動するひとつの成功体験として十分なものであったと思量される。今後、語学検定等の機会を与え、海外に目を向けるという意識をさらに展開できるように配慮するとともに、2年生向け授業である「国際農学講義Ⅰ」で海外実習体験をプレゼンテーションすることによって、下級生の目を海外に向けるよう仕向ける”アンバサダー”としての役割を期待している。</p> <p>【海外の農業事情を理解させる】・・・先方の配慮により、動物生産の上流(飼料製造)から下流(畜産加工)までの、技術水準の高い施設を見学することで、当該国で行われている農業生産が国際的に高い競争力を有していることを学生が実感する良い機会となった。今後、国際シンポジウム参加や、国内農業生産施設の見学等の機会を与え、農業生産のグローバル化が意味するものをより本質的に理解させることを目指したい。</p> <p>【人的交流の活性化を図る】・・・滞在中、受入先大学生と非常に友好的に</p>

過ごしており、帰国後も引き続き SNS などでコミュニケーションを取っている様子である。また今回の実習が引き金となって、本年 5 月にカセサート大学教員が本学の教育システム見学のために来学したい旨、連絡があり現在対応中である。さらに、本年の夏期集中講義にカセサート大学学生が特別聴講生として参加する予定になっている。このように、本取組は学生だけでなく、教員の交流活性化にも波及効果を及ぼしている。